

勇者 The brave man took everything,
but I'm a confirmed happy man and I don't "Zamaa"!!!
④全部取られたけど 幸せ確定。

俺は「ざまあ!!」なんでしない。

石のやつさん
Ishino Yassan

Illust. サクミチ



CHARACTERS



第一章 さらば、勇者パーティ

「悪いが今日でクビだ」

パーティリーダーであり、勇者のジョブを持つリヒトが俺に告げた。
さらにリヒトは憐れむように続ける。

「今までずっと仲間として支え合いながらここまで来たよな……だが、
すぎた。わかっているだろ、ケイン」

確かに最近の俺は取り残されていた。

勇者のリヒト。

剣聖のケイト。

聖女のソニア。

賢者のリタ。

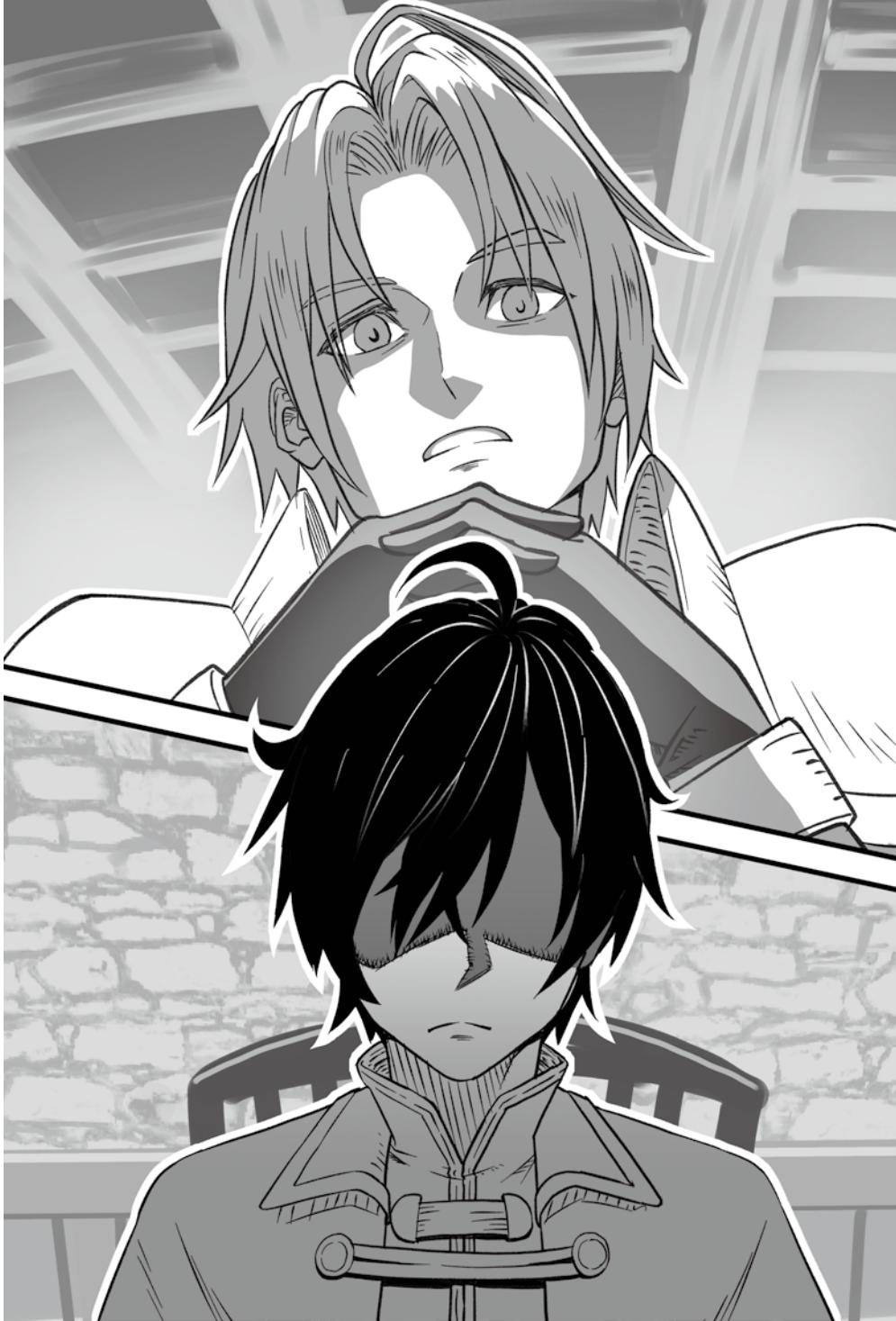
そして俺、魔法戦士のケイン。

五人揃ってSランクパーティ『ブラックウイング』。
俺達は幼なじみでもある。
だが、成長した四人に、俺は追いつけなかつた。
とはいえ、別にクビになつても良いと思っていた。
この世界では、冒険者ギルドが格付けするパーティのランクと冒険者のランクがある。
俺はこのパーティでは落ちこぼれだけど、冒険者ランクはSランクなのだ。
ここを出れば、いくらでも拾つてくれるところがある。
こいつらにはついていけないかもしねないが、他のSランクパーティならまだ通用するし、Aランクのパーティまで落とせば引く手あまただ。
俺にもそのくらいの価値はある。

「確かに魔法戦士の俺じや皆についていくのは難しいな」
俺はリヒトにそう言つた。

幼なじみである俺にはこいつの狙いがわかる。どうせハーレムが欲しいだけだ。
俺とリヒト以外のメンバーは全員女だからな。

だが、リヒトはもつともうしい理由をつけたいようだ。



「勇者として飛躍するには大きな手柄が必要になる。残念ながらお前とじや無理なんだ。わかつてくれるだろ？ それに、パーティを抜けてもお前が親友なのは変わらないからな」

俺は他のメンバーを見回す。

元恋人である賢者リタの目を見た。彼女はもう昔のような優しい目をしていない。リヒトの女になつたのは知つていた。

リタが口を開く。

「私もリヒトの意見に賛成だわ！ あなたはもうこのパーティについていけない。きっと近いうちに死ぬか大怪我をするから、さっさと辞めた方が良いわ。これはあなたの事を思つて言つているのよ」

「リタ……そうだよな。ありがとう！」

俺はリタに微笑みながら礼を言つた。

ふと、リタの左手に目がいく。

薬指には見覚えのない指輪があつた。これは恐らくリヒトが買い与えた物だろう。

俺があげた指輪はもうしていない……

勇者と魔法戦士ではジョブとしての価値が違いすぎる。リタがリヒトを選ぶのも仕方ないと諦めがついた。

ちなみに他の二人も同じ指輪をはめていた。

ハーレムパーティに俺はいらない。

まあ一応確認だけしておくか。

「リタ……二人の関係は終わりで良いんだな」

「……」

リタは答えない。俺はさらに問う。

「君の口から聞きたい」

「もう、あなたを愛していない」

そんな事はもうとつくにわかっていた。あくまで確認だ。

俺はリタに笑つてみせた。

「まあ、リヒトは良い奴だ。幸せになれよ！」

リヒトの名前を出すと彼女は驚いたようだった。

「し、知つていたの？」

「ああ。まあ、仕方ない。リヒトは勇者だ。こいつなら諦めもつく」

「ごめんなさい！」

「気にするな」

俺にとつては今さらどうでも良い事だ。

そこへリヒトが割つて入る。

「もういいだろ。村に帰つて田舎冒険者になるか、別のパーティを探してくれ」

「そうだな、俺は他に行くよ」

こいつは俺とリタが付き合つているのを知つていて寝取つた。

親友だと思つていたのにな……馬鹿野郎。

リヒトは勝ち誇つた顔で俺を見つける。

思いつきり、俺をあざ笑つているんだな。

何をしても優秀で、顔も良くて、強くて、おまけに勇者だ。

そんなお前が、俺は自慢だつたんだ。

彼らに背を向けると、四人の幼なじみが一斉にお別れの言葉を言ってくる。

「じゃあな！」

俺はそれに元気に応えた。

リヒト達と別れた俺は一人町をぶらついていた。

実は俺、ケインには、前世の記憶がある。

日本という国で小説好きの学生だった、というだけのものだが。

その時によく読んだラノベのテンプレで“ざまあ”というのがあった。今の俺はそれをしてもいい状況だが……別に“ざまあ”なんてしなくて良いんじゃないかな？

そもそも、俺は巻き込まれて勇者パーティにいただけなんだ。

どうやってこの世界に来たのかは覚えていないが、気が付いたら俺は十歳ほどの少年になり、ある村にいた。

そして、村にいた幼なじみが全員、四職——勇者、聖女、剣聖、賢者だつたのだ。

ちなみに四職というのは、魔族の四天王及び、魔王を倒すために必要と言われているジョブの事だ。

魔族は魔王に仕える存在全てを指す。四天王はその中でも特に強大な力を持つ四人が持つ称号である。

幼なじみがそんな大変な戦いに巻き込まれるんだ、俺だつて何もしないわけにはいくまい。それだけの事だつた。

勇者パーティなんて、歳をとつてもずっと冒険しなくてはならない。定住はできないし、旅が終わる頃には爺さんだ。

それに、勇者パーティは名誉のために大金を捨てなきやならない仕事なんだぜ。

普通はワイバーンを狩れば一体でも大金が入る。日本円で約五百万円くらいだ。

だが、勇者パーティは国に所属するから、報酬は全部国に取られる。

そんな事をさせられながら、最後は魔王と死ぬか生きるかの戦いをさせられる、究極の貧乏く

じだ。

だから、正直に言えば、「追放してくれてありがとう」なんだよ！



俺がパーティを追い出されてから数日——ソロになつた途端、俺の周りは騒がしくなつた。ギルドに行けば毎日冒険者達に囲まれる。

「私達とパーティを組みませんか？ 私、ケインさんに憧れています」

「俺のところに来ませんか？ 頬が良い女もいますよ？」

「ブラックウイングなんてクソだわ……だつてリヒトさんのハーレムパーティじゃないですか。私はケインさんの方が好きです。絶対満足させますから」

こんな具合で俺の周りに集まつてくる人達に、俺は笑顔で対応した。

「誘つてくれてありがとう！ だけど今は好きな事をしたいんだ」

これだけ人が寄つてくるのも無理はない。

俺はソロでワイバーンだって狩れるのだ。

そんな人材、どう考えてても欲しいだろう？

ギルドの受付嬢だつて、俺を見てソワソワしているよ。

そりやそうだ。これだけ使える冒険者はギルドも重宝する。

だから俺は、リヒト達なんて気にしない。普通に幸せに暮らせるんだからな。

早速新しいパーティメンバーを集めること。

まあ、ギルドの掲示板に募集を載せるだけだが。

手続きを済ませ、ギルドの酒場で酒を飲みながらゆっくりしていると、長い金髪の女性が話しかけてきた。

「ちょっと話をさせてもらつて良いだろうか？」

「別に構わないけど、メンバー募集の話かな？」

「そうだ。私の名前はアイシャ。Aランクでそこそこ有能な方だと思うのだが、メンバーとしてどうだろうか？」

「まさか、剣姫アイシャか……？」

確かにジョブはクルセイダー。美しい剣技と容姿で有名な女騎士だ。

「俺で良いのかな？ アイシャさんみたいな方が入つてくれたら確かに嬉しかったけど……」

俺が戸惑い気味に返すと、アイシャは語氣を強くする。

「馬鹿を言うな！ ケイン様はSランクなんだぞ！ 私にとつてあなたは雲の上の人だ」

俺はそれを聞いて頷く。

「じゃあ、採用で」

「本当なんだな！ 後で嘘とか言つたら泣くからな！」

「嘘なんて言わないよ……ただ、今はまだパーティメンバーが集まつていないから、活動は人数が集まつてからになる」

「ならば問題はない……ほら！」

アイシャが指差した先には、水色の髪の女の子がいた。

「あの……私はアリス。アークワイザードをやつているわ。メンバー募集しているのよね？」

「採用」

「えつ……」

これまた大物だ。

アイスドールのアリス。魔法を得意とするジョブ、アークワイザードのAランクだ。アイスドールは、めつたに笑わない事からついたあだ名らしい。

「そんな簡単に決めて良いのか？」

アイシャが尋ねてくる。

「うん、最初にパーティに入つてくれたのがクルセイダーのアイシャさん。メンバーのジョブのバランスを考えると、攻撃を担つてくれるアークワイザードは貴重な戦力だ。後は回復系の人人がいれば……」

「それなら……おーいメルル、早くこつちこつち！」

アリスがギルドの奥にいた女の子に声をかけた。

「メルルって……」

「メルルはアーフプリーストだから回復役としては最高よ！ 色々と恵まれてなくてまだBランクだけど、実力は私が保証する」

「よろしくお願ひします……」

茶色いおかっぱ頭でマンツを羽織つた少女が頭を下げる。

「うん、よろしく。後は贅沢を言うなら荷物持ちとしてボーテーが欲しいな……」

俺が呟くと、今度はアイシャが口を開いた。

「ボーテーなら、あの子が良いだろう……収納魔法（大）が使える。クルダ！」

アイシャの呼びかけに応じてやつてきたのは、くせ毛でおさげの女の子だ。

「はーい。アイシャさん、どうしたんですか?」

「ケイン様のパーティ募集の枠があるけどどうだ?」

「え……ケインってあの勇者パーティのケイン? そんなの入るに決まつてますよ! 良いんですけど?」

こちらを見上げてくるクルダに俺は頷いた。

「よし、これでメンバーは揃つたかな……」

あつという間にパーティが決まった。

俺は早速新パーティのミーティングを始める。

「今日は俺のパーティに参加してくれてありがとうございます」

そう言って頭を下げるど、アイシャが首を横に振る。

「何を言つているのだ! Sランクであるあなたのパーティに入れてもらえるんだ。礼を言いたいのは私だ」

アイシャの言葉にアリス、メルル、クルダが同意する。

「私もそう思うわ」

「はい、あたしもです。でもあたしなんかで務まるんですかね……?」

「うちもCランクなんだけど大丈夫ですか?」

俺は不安そうな新メンバー達に、笑つて答える。

「ああ、大丈夫だ。だが冒険を期待していたようならすまない。このパーティのモットーは無理をしない。そして、全員が楽しく暮らす、だ!」

「「「楽しく暮らす!?!」「」」

声を揃えて驚く皆。だが、嫌そうな顔をする者は一人もない。

「そうだ。簡単に言うと、皆でお金を稼いでのんびり暮らす。それ以上でもそれ以下でもない! それが嫌なら抜けてもらって構わない」

「ふむふむ……それで報酬の分配などはどうするのだ?」

アイシャが口にした疑問は当然のものだ。俺は説明する。

「基本は俺が管理する。最初の一ヶ月は報酬から生活費のみ支給する。そして残りのお金で、俺達のパーティハウス——つまり拠点を買うつもりだ。もちろん全員の共同名義でな。その後の報酬は六等分して、六分の一は貯金、残りを平等に分配でどうだ?」

俺が説明を終えると、メルルがおずおずと聞いてくる。

「あの、あたしはBランクなんですが、同じ額をいただいて良いのですか?」

「構わないよ。皆、とりあえずそれでどうかな? アイシャとアリスはAランクだけど大丈夫?」

「私は問題ない……Sランクのケインさんが同じ額なのに、文句なんて言わないさ」

「私だつてそうよ。後方支援なのに贅沢なんて言えない」

アイシャとアリスも同意してくれた。

「それじゃ決まりだな！ そうだな、最初は稼がなきやいけないし、ちょっと頑張つてワイバーンを狙つてみようか」

「「「「ワイバーン!?」」」

「そう驚かないで！ 基本は俺がやる。皆は後方支援してくれれば良い」

ワイバーンは亞種とはいえ立派な竜だ。

普通は人数を集めて、数で倒す方法をとる。

それをたつた五人……一人はボーダーだから実質四人で倒そうと言つてているようなもの。驚くのも無理はない。

「ひとまず今日は解散して明日の朝、町の表門に集合だな。もし問題なく依頼をこなせたら祝杯を挙げよう！」

「「「「はい！」」」



翌朝——俺が待ち合わせ場所の門で待つていると、四人が揃つてやつてきた。

「よし、行こうか？」

事前に馬車を用意しておき、必要な物は全部積んでおいた。

今回の依頼はワイバーンの素材回収。

つまりはワイバーン討伐だ。

わりと難度の高い依頼だが、準備は万全だ。

するとクルダが尋ねてくる。

「あの……御^{ぎょ}者は誰がするのですか？」

「それは俺がやるよ」

クルダをはじめ、メンバーの皆は一番ランクが高い俺に御者をやらせる事に気が引ける様子。

まあ、そんな事はどうだつていい。俺は皆が乗り込んだのを確認して、馬車を出発させた。

馬車に揺られて三時間——ようやく目的の場所に着いた。

「さてと……ようやく到着したな」

「ここは……ワイバーンの岩場？ 大量のワイバーンが生息しているという……」

アイシャの呟きに俺は頷いた。

「ああ、私には無理だ……」

アイシャは卒倒しそうになる。俺は慌てて彼女を支えた。

「大丈夫だよ、アイシャ！ ワイバーンを倒すのは俺！ 君は仲間を守るだけで良い。とりあえず、アリスさんは視界に入つたワイバーンの翼に攻撃魔法を。メルルさんは適宜回復を頼む！」

こうして俺達のパーティの初戦が始まった。

「これが勇者パーティに所属したSランクの実力なのか……？」

そう呴いたアイシャの目の前には、もう十を超えるワイバーンが積まれている。

俺はこのワイバーンを全部たつた一人で倒した。

だが、まだまだいけるな。

「メルル、回復魔法は後何回使える？」

俺が尋ねると、メルルは元気よく答える。

「たぶん、十回はいけます」

「アリスはどうだ？」

「まだ大丈夫よ！」

「それじゃクルダ……どのくらい収納は可能だ？」

「後八体が限界です」

「よし、わかつた」

その後もワイバーンを狩り続け、結局、十八体ものワイバーンを倒した。

普通のSランクなら一体が限界なので、十分な収穫といえよう。

「あのケイン様……」

「同じパーティなんだから、様をつけるのはやめよう、メルル。それでどうした？」

「なんで、ワイバーンをこんなに狩れるのですか？」

「それはメルルのおかげだよ！ 回復魔法でいつでも体力を満タンにしてもらえるからな。体力が尽きるまでいくらでも狩れる。ありがとう！」

俺はさらに言葉を継ぐ。

「それにアイシャが皆を守ってくれるから、俺はワイバーン討伐に集中できる。アリスが翼を焼いてくれたから簡単に倒せたし、クルダが運んでくれるからたくさん討伐できた。皆の力だ」

少し恥ずかしくなつてきたな……

でも、俺の本心だ。

「ケインにそう言つてもらえると助かる」

「ほほ、固定砲台なのに……ありがとう」

「ただ、回復魔法使つていただけです」

「そんな事言い出したら、うちなんか最後に収納しただけですよ」

「アイシャ、アリスは頷いてくれたものの、メルル、クルダはまだ、自分の力に納得していないみたいだ。」

「俺一人なら一体しか倒せなかつた。それが十八体だ。皆、自分に自信を持つていい。それに、これで目的のパーティハウスが買える」

「その時、俺はふと気になつて聞いてみた。」

「そういえば、今回の報酬を等分にしたらどれくらいになるんだ？」

「その疑問にはアリスが答えてくれた。」

「一人当たりワイバーン四体弱の計算だから……節約して十年、普通なら五年は暮らせるわね」「それを一日で稼いだんだから凄いな」

「アイシャが呆れたように言うと、クルダがわなわなど震えていた。」

「うち、ただのポーターですよ……こんな扱い初めてです」

「俺はそんなクルダの頭をぽんぽんと叩いてから、皆を見回した。」

「ひとまず、お疲れ様！ 今日はここまでにしてギルドに戻ろうか」

「これでパーティハウスは手に入るかな。」

「俺はそんな期待を胸に、町へ向かつた。」

「その日の夕方、町に戻つてきた俺達は早速ギルドに報告しに行つた。」

「お帰りなさい、ケイン様！ 依頼の方はどうでしたか？」

「微笑みかけてくるギルドの受付嬢に、俺は上機嫌で答える。」

「もちろん、こなしてきたよ。それで倉庫を使わせてくれないか？ 後、今日の報酬は即金で支払つてもらえると助かる」

「良いですよ、そのくらい融通します。それじゃあ、倉庫に行きますか？」

「ああ、ちょっと待つてくれ……」

「俺はそう言つて、傍らにいるクルダに声をかける。」

「クルダ、悪いけど倉庫まで付き合つてくれ。他の皆は酒場で飲み物でも飲んで休んでて」「了解しました」

「「「はい」「」」

「その後、受付嬢とクルダとともに倉庫に移動する。」

「それじゃクルダ、出してくれ」

「はーい」

クルダが収納魔法でしまっていったワイバーンを、目の前に積み重ねていく。
それを見た受付嬢は驚いて笑つてしまつていた。

「あはははっ、一体じやなかつたんですね？ 十八体！ 騎士団でも一体を相手にするのが精一杯
なのに……とりあえず、ギルドマスターを呼んできます！」

そう言うと、受付嬢は走つて行つてしまつた。

しばらくして、ひげもじやでがつしりした体格の男、ギルドマスターのアウターが倉庫に入つて
きた。

「久しぶりだな。ギルドマスター」

「やつぱりケインだつたか……派手にやつたもんだ。ワイバーンの買い取りと言つたな。だが、こ
の数だと恐らく依頼料と合わせて金貨千枚ほどになる。さすがに即金は難しい」

この世界の金貨一枚は、日本円でおよそ十万円。千枚だと約一億円だ。

「だが、俺は今すぐパーテイハウスが欲しいんだ」

俺が拠点の話を切り出すと、ギルドマスターはぱんと手を打つた。

「なら話は簡単だ！ パーティハウスはギルドが斡旋あっせんしている。そこから選んでもらつて、ハウス
分の金額を差し引いた報酬を支払うよ」

「それなら構わない」

その後、メンバー全員で受付に行き、物件の情報をいくつか見せてもらつた。

パーテイハウスは皆が住む場所だ。全員が気に入らなければ意味がない。しかし、皆遠慮してい
るのか、なかなか決まらない。

だつたら一番良いのにしつくか。俺は早速提案する。

「これなんかどうかな？ 部屋がたくさんあるからそれぞれ自分の部屋が持てるし、倉庫や調理場

も十分だ。何より他の家と違つて風呂場がある」

「だが、これ金貨五百枚だぞ！ 高額すぎないか？」

俺の選んだ家の資料を見たアイシャが、驚きの声を上げた。

アリスやメルル、クルダもうんうんと頷いている。

しかし、俺はこの家の有用性を主張する。

「君達は冒險者だけど、女の子でもあるんだよ？ この家がある地域は治安がいい。それにギルド
も衛兵の詰め所も近いから安全だ！」

声高に説明する俺をまじまじと見つめる四人。

やがて渋々ながらも納得してくれた。

皆の許しを得た俺は、家の資料を見せてくれていた受付嬢に向き直つて言う。

「それじゃ、このハウスにするよ。名義はパーティメンバー全員で」

「これにするんですね。かしこまりました。では、早速手続きいたします」

こうして俺達は最初の目標であるパーティハウスを、パーティ結成からわずか一日で手に入れた。



パーティハウスを購入した次の日。

俺達は新居で使う家具を買いに行く事にした。

待ち合わせ場所に到着すると、女の子達四人は既に揃っていた。

「皆、早いね……それじゃ買い物に行こうか。資金はたっぷりあるから、必要な物を全部買い揃えよう! 元から持っている物があつても、くたびれているならこれを機に新品に買い替えても良いからね」

俺がそう言うと、皆は顔を見合させた。

「Aランクとはいえ宿屋暮らしだ。ろくに家具など持つてない。すまないが、全部買う事になる」

「私も同じ、持ち物は杖^{つえ}と着替えしかない」

アイシャの言葉にアリスも頷いた。

「あたしも似たようなものですね」

「ポーターは稼ぎが少ないので……すみません、何も持つていません!」

メルルとクルダもすまなそうに俺を見てくる。

だが、そんな事はなんの問題もない。

「心配しなくてもいい。俺も同じだ」

そもそも冒険者なんてしていれば、よほど安定して稼いでいない限り賃貸^{ちんたい}すら借りられない。冒険者として成功していくても、家を持たず宿で生活している者が大半だ。

だから、皆が装備と着替えくらいしか持つていなくても驚かない。

俺だって勇者パーティにいたが、お金は勇者であるリヒトが管理していたので、大金を使う機会などなかつた。

「さて、大きい物から買おうか……まずは家具からかな」

俺達は早速家具屋へと向かつた。

到着した家具屋で、俺達は店内を見て回る。

この世界では全ての家具がオーダーメイドだ。

なので店に置いてある物は、中古品かサンプルという事になる。

工場などの生産ラインがないからそれほど不思議ではないのだが、この世界に来た当初は驚いた記憶がある。

全ての家具で全員の希望を聞いていたらきりがないので、全員で使う物は俺が頼んで、各自の部屋の家具は各々で注文する事にした。

「お金は気にしなくて良いよ！ 家具は長く使う物だからよく考えて頼んで」

「〔〔〔〔はい〕〕〕〕

その後は俺も自分なりのこだわりを伝えて、家具を注文した。

思ったよりも時間がかかるらしく、家具の完成まで約三週間との事。

完成したら配達してくれるそうだ。

寝具やカーテンや絨毯のみならず、調理器具なども同じくらいの時間がかかるらしい。そうなると今買える物は、食器や小物しかない。

だが、それらは今あつても仕方ないので後日買う事にした。

俺は皆に確認する。

「これで、必要な物は全部注文し終わつたかな？」

アイシャが首を傾げながら言う。

「こういつた経験がないからわからないが、たぶん大丈夫ではないか……？」

「皆宿屋暮らしだったんだから仕方ないわ。足りなければ後で買えば良いのよ」
きつぱりと言ふアリスに、メルルとクルダは頷く。

「そうですね……自分がパーティハウス持ちのメンバーなんだつて、今頃になつて実感してきました」

「ポーターなのに部屋持ち……信じられません」

なんだかんだ言つて皆、満足のいく買い物ができたのかな。

「今日はもうやる事はないし、そのあたりでお茶でも飲みながら少し話さないか？」
パーティを結成してまだ二日しか経つていない。

これから一緒に暮らすのだから、親睦を深めておいた方がいいだろう。

そう思つての提案だつたが、皆乗り気のようだ。

「そうだな！ パーティの連携は重要だし、意思疎通をスムーズにするためにもそのような場は重要だ」

「そうね」

「あたし暇ですから大丈夫です」

「うちももちろん暇です」

アイシャ、アリス、メルル、クルダは元気よく返事をしてくれた。

それから俺達は喫茶店のような場所で、今後の事を色々と話し合った。

「昨日のワイバーン狩りで思つたより稼げたから、生活費もかなりの額を分配できるな。家具がない間はハウスもほとんど使えないから、今のうちにお金を分けておこう」

「それは助かるな。一人当たりどのくらいになる?」

俺はアイシャの質問に答える。

「そうだな……後でパーティのお金が足りなくなると困るから、今回は金貨二十枚ずつにしようとと思う。どうかな?」

「金貨二十枚……そんな大金良いの?」

アリスがびっくりしたように聞き返してきた。

メルルとクルダも困惑気味だ。

「あの……あたしはBランクですが、そんなに……?」

「う、うちちはボーテーです。金貨なんて手にするのは初めてです」

金貨二十枚だと、日本円にして二百万円くらいになる。
確かに大金はあるが、アイシャやアリスは冒険者ランクが高く、そこそこ名前も売れている。
このくらいの金額なら、稼いだ事もあると思っていたが。

皆今までどのような待遇を受けてきたのだろうか……気になるな。
まあ、今はランクだとそんなものは関係ない。

俺の目標は“無理をしないで全員が楽しく暮らす”だ。

「三週間もあるんだ。まずはそのお金でゆっくりしてくれ。今泊まっている宿の支払いもあるだろう? それに今後は、月に金貨四十枚ずつ分けられるようにするつもりだ。一応、パーティとして活動するのは週に三日くらいで、残りは休みにしようと思っている」

俺がそう伝えると、アイシャが慌てて尋ねてくる。

「そのペースで金貨四十枚は、かなり厳しいのではないか?」

「あくまでこれは目標だ。だが、実現できると俺は考えている」

「どうだろうか……そんな夢のような生活ができるならしてみたいが……」

アイシャはなおも不安そうだ。

アリス、メルル、クルダもアイシャと同じような考え方らしい。

「それは、冒険者なら誰もが送つてみたい生活ね」

「夢の先にある夢みたいなものですね」

「実現すればうちは世界で一番幸せなボーテーになります」

まあ、最初は皆疑問に思うだろう。

だが、実現できるかどうかの不安はあるが、皆反対という感じではない。

「それじゃ、今日はこれで解散しよう。俺は家具はないがハウスの方になるべくいるようにする。その方が連絡も取りやすいだろう。何かあつたら来てくれ。それじゃあ、また」

そうして俺は店を後にして、購入したばかりのハウスに向かうのだった。



ケインが去った後、アイシャ達はその場に残り、話をしていた。

ケインのパーティに入つてから二日の中にイベントがありすぎて、彼女達は頭が追いついていかつた。

最初に□を開いたのはアイシャだ。

「Sランクって凄いな……」

「凄いなんてものじゃないわ。たつた一日で金貨千枚よ！ ありえない！ しかも、普通の人なら自分の取り分を多くするのに……均等に分けるなんて信じられないわ」

アリスが語氣を強めた。

アイシャもうんうんと頷く。

「確かにありえないな……私はただ立つていただけだ」

「私だって、数発魔法を放つただけだわ……正直に言つけど、パーティに入れてくれたのって体目當てかと思ったの」

勢いよく話すアイシャとアリスを、メルルとクルダは呆然と見ている。

「ケインに関してはそれはありえないだろうな……彼がその気になれば、いくつでも可愛い奴隸どれいが買える」

「そうなのよ！ サっきもうつた金貨二十枚で美女奴隸が買えるわ」

アイシャもアリスも、自分の姿が並み以上である事は十分自覚している。

「いくどなく言い寄られた経験がある一人だったが、ケインからは全く下心を感じないのだ。

アリスは続けざまに言つ。

「正直私はそういう関係になつても良いと思っていたわ。それで人生が保証されるなり十分と思つていたの」

「私はそこまで打算的ではなかつたが、それで、Sランクのパーティに入れるなりとは考えたな」

「その時、アイシャはふと感じた事を□にした。

「それにしてもアリス。お前は『アイスドール』なんて言われているから、あまり喋らない奴しゃべだと思つていたんだが……」

「私は元々こういう性格なの。その名前は周りが勝手に呼んでるだけよ」

そこでようやくメルルとクルダが口を開いた。

「アイシャさんやアリスさんが好待遇なのはまだわかりますよ。Aランクで立派な二つ名までついでいるんですから……あたしなんてBランクの無名冒険者です。そんなあたしがパーティに入れてもらひたるなんて」

「うちもまさかこんなに良くしてもらひえるなんて思っていなかつたです。ポーターなんて“運び屋”とか言われて蔑まれる存在ですからね」

この世界ではジョブによる格差が存在する。戦闘で活躍するクルセイダーなどは尊重されるが、ポーターのような地味なジョブは低く見られがちだ。

だが、アイシャは首を横に振った。

「ポーターでもクルセイダーでも変わらないさ。何せ相手は元勇者パーティ所属のBランク。ケインから見れば私達は皆同じようなものだ」

話が一段落したところで、皆で冷えたお茶をする。

すると、今度はメルルが話し始めた。

「あの……皆さん、仕事の話ばかりですが、ケインは凄い美形ですよね？ 艶のある黒髪に黒目、体は鍛えられているけど決して筋肉ダルマじやなくて細い。しかも肌なんて女のあたしよりきめ細

やかで綺麗なんですよ…」

クルダも同意する。

「そうですよ、あれは反則です！ 勇者パーティにいた時はきっと目立たないようにしていたんでしょう」

その後も話は過熱していき、気付けばもう夜になろうかという時刻だった。

これだけ話していくれば欠点の一つも出てきそうだが、ケインに関しては全くなかつた。

「まあ、私達を拾ってくれたケインの期待に応えられるよう、これから一緒に頑張っていこう」

最後にアイシャがそう締めくくり、今回のお茶会はお開きとなつた。



家具が来るまでの間、何もせずにいるのも退屈なので、俺ケインは家の掃除をする事にした。せつかくパーティハウスを手にしたのだから、綺麗にして皆を迎えるようと思つていたんだが……これが案外難しい。

とにかく家が広すぎるし、掃除道具なども揃っていない。早々に自力での掃除を諦めた俺は、ギルドを頼る事にした。

ギルドに着き、受付に向かう。

「依頼を出したいんだが……」

「Sランク冒険者のあなたが依頼を受けるのではなく出すのですか？　どのような内容でしょう？」

受付嬢だけでなく、ギルドに居合わせた冒険者全員がこちらに聞き耳を立てている。

Sランク冒険者が依頼を出すのがそんなに珍しいか？

「ただの掃除の依頼だからFランクか見習いで十分だ……ついでに掃除のコツを教えてくれる奴だと助かる」

受付嬢は頷いた。

「わかりました。そういう依頼なら、一人当たり銅貨三枚も出せば良いと思います。何人必要ですか？」

「なら、六人ほど頼めるか？」

受付嬢は再度頷いて、依頼書を作成する。

彼女がそれを貼り出した瞬間、子供の冒険者がひつたくるように依頼書を持つていった。

「ケイン様、この依頼は僕達で引き受けても良いかな？」

依頼書を手にした男の子の冒険者が、俺に尋ねてくる。

「もちろんだよ。ついでに掃除の仕方も教えてくれないか？」

「了解、任せておいて！」

すぐに依頼に取りかかりたいと言っていたので、仲間を連れてきた彼を早速パーティハウスに案内し掃除を始めてもらう。

子供とはいえ、こういう依頼には慣れているのだろう。あつという間に家が綺麗になっていく。
そして、俺は……隅^{すみ}で休んでいた。

依頼書を持ってきた男の子が呆れたように笑う。

「はははっ、Sランクのケイン様でも苦手な事があるんだな」

そう、俺は掃除が壊滅的^{かいめつ}に苦手な事がわかつた。

今まで旅をしていてずっと宿屋暮らしだったから、掃除なんてした事がない。

馬車の御者もできるし料理もできるのに、まさか掃除がここまでできないとは思わなかつた。邪魔をしちゃいけないので、掃除は彼らに任せることにしたのだ。

三時間ほど経った頃には、家がぴかぴかの状態になつていた。

「それじゃ、依頼書にサインをくれるかな？」

子供達を代表して、先ほどの男の子が依頼書を俺に渡してくる。
「はいよ……後これ、お駄賀^{だちん}だ」

俺は通常の報酬に加えて全員に銅貨を一枚ずつ渡した。

「ほら皆、ケイン様が追加報酬をくれたぞ。お礼を言おうぜ」

「『『『『ありがとうございました』』』』

声を揃えて頭を下げる子供達に、俺は笑顔で応える。

「また何かあつたら頼むよ」

彼らは笑顔で帰つていった。

俺は綺麗になつたパーティハウスを改めて見て回る。

勇者パーティの時はしょっちゅう野営やえいをしていたが、ここには風呂とトイレ、自分の部屋まである。

家具が届くまでは三週間ほど。それまでは毛布一つあれば十分だろう。

俺は何かあつた時に対応しやすいように、入口に一番近い部屋を自室にした。

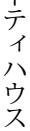
他は皆で話し合つて決めていけば良いと思う。

後は家事なんかができる人がいればなあ……

他のメンバーも俺と同じく冒險者だし、家事は期待しない方がいいだろう。

家事をしてくれる人がいたらかなり助かるのだ。

皆に相談する必要があるかもしれない。



パーティハウスに着々と家具などが届き始めた頃——

よく考えれば、家事だけでなくハウスの留守番や管理をする人間が必要だと気付いた。

これは俺だけで決めてはいけない事だ。

「すまないが、急ぎうちのメンバーを一人、誰でも良いからさが搜してきてほしい

前世ならスマホがあるから楽だけど、今はこうやってギルドに頼まなければならない。

こんな事なら泊まつている宿屋を聞いておくべきだつた。

「そうですね、それならまた見習い冒險者に依頼しましょう

すると、またもやあつという間に、依頼書を手にした見習い冒險者の女の子がやつてきた。

「ケイン様、これ私が受けても良いよね！」

「うん、お願ひするよ。俺のパーティメンバーから誰でも良いから一人連れてきて」

「わかった！」

彼女はかなり優秀で、三十分ほどで見つけてきた。

「はい、搜してきました、確認のサインをください」

「早いね……はい、これでいいかな。後これ、お駄賃ね！」

俺はお駄賃として銀貨一枚を手渡した。

「さすがケイン様、太つ腹ふとばら！ ありがとう！」

「ご苦労様！」

彼女が連れてきたのはクルダだつた。

「ケイン、どうしましたか？ 急用ですか？」

不思議そうに尋ねてくるクルダに、用件を伝える。

「いや、ちょっと付き合つてほしいんだ……」

「どこに行くのかわかりませんが……了解しました」

「それじゃ、お願いする」

そうして俺はクルダを連れて目的の場所に向かつた。

「あの、ケイン……ここは奴隸商どれいしょうですが……まさか、うちを売り飛ばす気ですか!?」

急にこんなところへ連れてこられてクルダは驚いたらしい。

「何を言つてるんだ……俺がそんな事するわけないだろ？ 大事なパーティメンバーなんだから。ここには奴隸を買いに来ただんだ」

それでもクルダの不安は拭ぬぐえなかつたらしい。

今度は別の心配をされた。

「あの、ケイン……そういうのが必要ならうちに言つてください……ちゃんとお相手しますよ……？」

「だから、違うんだ！」

俺はハウスの管理をしてもらう奴隸が必要な事を、クルダに一から説明した。

「あつ、そういう事ですね……あはははっ、うち誤解しちゃいました」

納得してくれたようで何よりだ。

「さあ入るか」

「はい」

俺がクルダを促うながして店に入ると、店員らしき男が声をかけてきた。

「これは、これは……またケイン様に来ていただけるとは光榮です。今日はどんな奴隸をお探しですか？」

この店員は俺の事を知つてゐるらしい。

そういえば前に一度来た事があつたな。

俺は早速希望を伝える。

「そうだな……女が良いかな」

俺の言葉にクルダがぎょっとしていたが、説明するのも面倒だしもう無視しておこう。
「女ですか？ そういう事なら、とびつきり美人の性処理奴隸がおりますよ！」

こいつもクルダと同じ勘違いをしているのか……

俺は仕方なく説明する。

「違う、違う……家事奴隸が欲しいんだ！ 大体そういうのが欲しいなら女性同伴で来るわけないだろ」

「ふむ、そうでしたか。ですが、今は家事奴隸がちょうどいないです。先日貴族の方がまとめて買つていかれまして」

「そうか、まあ家事ができれば良いから、人族で年齢が高い人から見せて……」

「はい、わたしは料理とか掃除が得意ですよ！ 二十七歳です」

俺が店員に伝え終わる前に、店の奥の方から声が聞こえてきた。

店員が怒鳴りつける。

「お前は黙つていろ！ 誰も買わねーよ！」

「わたしだつてここから出たいんです！」

「お前は黙つていろ！ 誰も買わねーよ！」

「わたしだつてここから出たいんです！」

店員の怒鳴り声に負けじと、その女性の声も大きくなる。
俺は気になつて店員に尋ねる。

「あの、その人……自分から売り込んできたんだし、見せてもらえませんか？」

「いや、見ても良いですが……気を悪くしないでくださいよ」

俺達は声の主の女性が収容されている檻の前に来た。

その女性は髪の毛が黒くて黒目、可愛らしい顔つきをしていた。

「ねつ、ケイン様。見るだけ無駄だつたでしよう？」

「これは……ケイン」

店員とクルダが俺の方を見てくる。

しかし、俺には何が無駄なのかわからない。

確かにこの世界の寿命は約五十歳だから、二十七歳はもうおばさんだ。

だが、その他に特筆すべき問題はないように思える。

「まさか、犯罪奴隸なのか？」

気になつて聞いてみると、店員は首を横に振った。

「貧乏農家の嫁よめでしたが、子供も産めないからと売られてきました。どうしてもお金にしたいと
いう事だったので、なんもあり」という条件で私が買いました」

「それだけ?」

「だって、黒目、黒髪の女ですよ……」

店員の言葉に俺は少しむつとして言う。

「俺だつて黒目で黒髪だ」

すると店員は半ば呆れたように説明した。

「はあ～良いですか？ 男の黒髪はカラス髪、女の黒髪は闇髪やみがみと言うんです。男の黒髪はカラスのようにならえません。逆らえれば激痛が走りますから」

そんな事は初めて聞いた。俺はクルダの方を見る。

「そうなのか？ クルダ」

「ええ……男の黒髪はいいけど、女の場合は最悪です……常識ですよ」

俺がこの世界に来てかなりの年月が経っているが、ずっと旅をしていた事もあってまともに物を知らない。

だから他の皆から見れば最悪なこの女性も、俺の目には素敵すてきなお姉さんとしか映らない。

俺は店員に確認する。

「ちなみに買うとしたらいいくらだ？」

「本当に買うんですか……銀貨一枚です」

異常に安いな。

理由を聞いてみると――

「誰も買わないような奴隸ですよ！ ただでさえ黒髪だから価値は低い。二十七歳だから女としても価値はない！ お店に置いているのは、なんでもありの奴隸が安く買えるという宣伝のためですよ」

俺はクルダをちらと見やる。

彼女は俺が買いたいならと、頷いてくれた。

「じゃあ、この人を購入しようかな？」

「嘘、本当に買ってくれるんですか！」

驚きの声を上げたのは、売り込んできた女性の奴隸本人だった。

店員も驚きと呆れを隠さずともせずに、手続きの説明をする。

「奴隸は銀貨一枚ですが、奴隸紋どくいんもんに銀貨四枚かかるので合計銀貨五枚になります」

「構わない」

そうして俺は銀貨五枚を支払い、その女性の奴隸に奴隸紋を刻んでもらった。

「これで、こいつはケイン様に逆らえません。逆らえれば激痛が走りますから」

奴隸紋についての説明を聞き終えると、俺達は奴隸商を出た。

そういえば、自己紹介をしてなかつたな。

「俺はケイン、こっちがクルダだ。君の名前を教えてくれるかな？」
女性は頭を下げて名乗つた。

「はい、シェスターと申します」

こうして家事の不安は奴隸を購入する事で解消された。

奴隸商を後にした俺達は服屋に来ていた。

シェスターがあまりにも酷い服装なので、着替えを買ってあげようと思つたのだ。

ここで俺が服を選んであげられれば格好良かつたかもしねないが、残念ながら俺にはそのセンスがない。

「シェスター、好きな服を選んで買っててくれ。俺はこういうのに疎い。後は生活に必要な物も揃えてくれ」

「あの……ケイン様、わたしは奴隸ですよ？ 本当に良いんですか？」

不安そうにこちらを見上げてくるシェスター。

俺は頷いた。

「気にしないでいいぞ。そうだ、クルダが見てあげてくれないか？」

「はい、わかりました！」

クルダは元気にシェスターの服を選び始める。

しかし、よく見るとクルダの服もあまり良い物ではないな……

俺はクルダに尋ねる。

「おい、クルダ。この前金貨二十枚も渡したのに、なんで服を買ってないんだ？」

「実を言うと、うちもおしゃれとは無縁で……」

クルダは申し訳なさそうに言つた。

俺はそれならと、店員を呼んだ。

「すみません、彼女達に似合いそうな服をそれぞれ五着くらいと、女の子が普段から必要な物一式を選んでもらえませんか？」

「わかりました、お任せください！」

二人に選ばせるといつまで経つても決まりそうにならぬ。

ややあつて店員が選んでくれた商品をまとめて購入する。

早速買った服をシェスターに着てもらつた。

今まで奴隸商で閉じ込められていたから、まだ清潔感はちょっと足りない。

それでもかなりましになつた。

これで、飯屋に入る分には問題ないだろう。

「あの……こんなに洋服買つてもらつて良かつたのですか？」

シエスタはまた不安そうに聞いてくる。

「気にして良いよ。それじゃお腹も空いたし、飯でも食うか……クルダも一緒にどうだ」

「お供します！」後、うちの服まで買つていただきありがとうございます」

俺は笑つて頷くと、二人を連れて服屋を出た。

俺達は近くにある、ちょっと高級な飯屋のテラス席についた。
そこでクルダとシエスタの椅子を引いてあげたのだが……

「どうした、座らないのか？」

シエスタに尋ねると、彼女は恐る恐る聞いてくる。

「あの……ケイン様、わたしは奴隸ですよ？」

確かに主人によつては奴隸を座らせない者もいる。

この店でもそういう奴がいるが……

「俺は気にしないから座ろう」

「……はい」

心なしか嬉しそうにシエスタは席についた。

俺はこほんと咳^{せき}ばらいをして、改めて宣言する。

「いいか、俺達が目指すのは、全員が楽しく暮らすパーティだ！ ポーターだから、奴隸だからって言うのはもうやめてくれ

「あのですね……うちはそういう贅沢に慣れてなくて……」

クルダの言葉を遮^{ささえ}つて、俺は言う。

「それでもだ。すぐには無理かもしれないけど、君はSランクの俺のパーティメンバーだ。おしゃれをして贅沢をしても誰も文句言わない。俺のためにも人生を楽しめ」

「ケインのため、ですか？」

「ああ。メンバーのクルダが楽しくなさそ�だと、俺も楽しくないからな！」

これだけは胸を張つて言える。

クルダも納得してくれたようだつた。

「そうですね……はい、わかりました」

「よし、話はおしまい！ 今日は俺が奢^おるから美味しい物を食べよう！ クルダもシエスタも好きな物を頼んでくれ」

「はい！」

返事は良かつたものの、彼女達はなかなかメニューを決められなかつた。

結局は……

「すみません、ミノタウロスのステーキ三つ……これでいいか？」

「はい！」

彼女達が贅沢に慣れるのはまだまだ先になりそうだ。

飯を食べ終わつた後、俺達はシェスタの家具を注文して解散しようとしていた。
別れ際、シェスタが尋ねてくる。

「そういえば、ケイン様は今どこに住んでいらっしゃるのですか？」

「今はパーティハウスにいるけど……シェスタが泊まれる環境じやないし、今日は宿屋にしようかな」

シェスタの家具は注文したばかりなので、ハウスに彼女の寝る場所がないのだ。

「わたしの事なら気になさらないでください。藁わらの上で寝ていた事もありましたから」

「藁？」

「はい、農村での暮らしなんてそんなものです。ベッドがあるのは裕福な家ですね」

なんとも悲しい話を聞いてしまつた。

「……それなら寝具を買ってハウスに帰ろう。それで良いか」

「はい、十分です！」

するとクルダがはい、と元気よく手を挙げた。

「ちょっと待つてケイン！ それならうちも行きたいです。ポーターも野営が多いから、地べたに寝るのも慣れていますし」

「わかった。でも、部屋の割り振りは皆が揃つてから決めるからな」

「はい！」

そうして俺達は三人でハウスに向かつて歩き始める。

「あの……そういうべき家具を買っていただきましたが、置ける部屋があるんでしょうか？」

道ながら、シェスタが尋ねてきた。

俺は頷いて答える。

「もちろん、シェスタの部屋もあるよ」

「つ！ ありがとうございます！」

その後、シェスタとクルダの寝具を買って、そのままハウスに帰つてきた。

いつたん部屋に荷物を置いて集まる。

「シェスタとクルダは奥のお風呂を使うと良いよ。そっちの方が大きいからね。男は俺一人だから

立ち読みサンプル はここまで